

平成 21 年 4 月 27 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520361

研究課題名（和文） 聖教目録の形成過程からみた高山寺資料の性格と学統の関わり

研究課題名（英文） Study on character of materials and a school of thought in KOZANJI temple.

研究代表者

徳永 良次（TOKUNAGA YOSHITSUGU）

北海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：50254694

研究成果の概要：高山寺の蔵書目録（聖教目録）は、鎌倉時代創建当時のものが残されているが、そこに記載された聖教の保存と管理の状況を現存資料と当時の記録類から検討してみると、口語資料が豊富な聖教（それらは主として華嚴系の僧侶の集団により行われたもの）は早く寺外に流出・紛失してしまい、方便智院などの真言の伝授を中心とする塔頭や弟子達により目録とその聖教の管理・編成が行われていったことが判明する。初期に聖教目録の再編成に尽力したのは覚園院第一世の義淵房靈典であることが判明したが、その後の覚園院代々はこの以降の聖教目録管理や、再編成にはほとんど関与していない。以後、高山寺は定型的な真言宗の事相面での伝授が活動の中心となっていく。そのため、高山寺に現存する資料には定型的な文語（口頭語の現れにくい）資料が多く残されている。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	450,000	3,150,000

研究分野：

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：高山寺 聖教目録 靈典 覚園院

## 1. 研究開始当初の背景

（1）高山寺所蔵の資料は寺内に現存するものだけでも約3万点にものぼり、その内の大半が院政期・鎌倉時代書写にかかるものである。このためこの時期の言語研究上、高山寺資料群は欠かすことにできないものであり、日本語史研究に多大なる貢献をしていることはいうまでもないが、しかしながら、従来これら資料はいわば「つまみ食い」的に取り上げられるに過ぎなかった。

（2）近年、築島裕氏、土井光祐氏らの研究により、高山寺本を日本語資料として扱うには、宗派・学統の歴史的展開や資料本来の性格を考察の視野に入れる必要性が提唱されつつある。例えば、築島裕氏は「一群の教団に属する学僧たちが、どのやうな範囲の文献を読み、どのやうな種類の訓点を解説し、（中略）どのやうな背景を成してゐたかを解明する」といふことである。（中略）（高山寺な

ど)のやうに、当時の聖教類を今日までよく伝存してある所も少なくない。これらの経蔵の全体を調査するならば、当時の各寺々の学僧が、どのやうな範囲の典籍を書写し、解読し、又加添してあたかといふ実態が明らかになる筈である。(築島裕「高山寺経蔵古訓点本の調査研究 古訓点研究の方法についての一試論」国語学 109 集 1977 年 9 月)」と指摘されており、このことにより、重層的な資料の性格を解明することが必要であると述べられている。

また、土井光祐氏は「特定の資料を国語史資料として扱おうとする場合は、宗派、寺院、学統の歴史的展開を踏まえ、当該資料がどのような教学活動の中で成立したものであるか、という資料本来の性格を考察の視野に入れて、言語的性格との関係を考察しなければならない。(土井光祐「高山寺関係聞書類の資料的性格と学統 講説聞書と伝授聞書とをめぐって」訓点語と訓点資料 第 95 輯 1997 年 3 月)」ことを主張され、高山寺資料が決して一様に、平均的な水準で存在している訳ではなく、資料ごとに個別の事情を勘案して利用すべき事を述べている。考えてみれば各氏の主張は当然のことではあるが、ほとんど考慮されることがなかったのも事実である。

(3)本研究に関しては、高山寺史として主に宗教史・日本史の方面からの経蔵の成立および目録の整備を論じたものに、田中稔氏、大山仁快氏らの言及がある。これらは宗教者としての明恵とその周辺の学僧の活動を体系的に論じたもので、その中に高山寺聖教とその古目録について言及している。聖教目録そのものの研究としては、奥田勲氏、石塚晴通氏、宮澤俊雅氏が『高山寺経蔵古目録』(1985 年 東京大学出版会)において、鎌倉時代成立とされる「高山寺聖教目録」、「高山寺経蔵聖教内真言書目録」および「法鼓臺聖教目録」についての影印・翻刻・書名用語索引と研究解説を公刊し、初めてその重要性について言及した。近年、これに続く形で宮澤俊雅氏、池田証寿氏、徳永良次によって、『続高山寺経蔵古目録』(2002 年 東京大学出版会)がまとめられ、「聖教目録/林月坊等」、「聖教目録/禅浄房/灌頂」、「禅上房書籍欠目録」、「方便智院聖教目録」の影印・翻刻・索引および研究解説が公刊された。ここにおいて、徳永良次は高山寺における経蔵と聖教目録の成立について、従来必ずしも明らかでなかった事象について解明することに成功した。つまり、従来高山寺聖教の成立は 1985 年に公刊された三つの聖教目録によって初期の全容が知りうるとされていたのであるが、実際には、それをさらに 20 年ほど遡る時期に、すでに大規模な聖教の収集と整

理、それに基づく聖教目録の作成が行われていたことが明らかとなったのである。わずかに 20 年の差であるが、徳永の明らかにした年代には、高山寺においては明恵上人存命中であり、上人の下で盛んに講義・伝授、聖教の収集・書写が行われていたのである。

従来、聖教目録の作成は外部の庇護者の命により、明恵上人の偉業を偲ぶ事業として明恵の高弟の指導により行われたのが始まりと考えられてきたのであるが、実は、高山寺の教学活動の一環として、実際の利用を前提として作成されたことが明らかとなったのである。

## 2. 研究の目的

(1)先に挙げたやうな背景から、近年では高山寺の資料を日本語の研究として扱う場合には、それらの書写・伝来・所蔵の状態について個別具体的に検討を加える論考が一般的になりつつある。

そこで、本研究では、この個別具体的な資料の伝存状況を超える形で、高山寺に現存する鎌倉時代成立にかかる聖教目録相互の関係について、体系的に検討し、かつこれら資料がいかなる状況の下に作成され、その方針の下で聖教がどのように保管・整理されていたかについて、高山寺創建当初の僧侶の事績と、現存する鎌倉時代書写にかかる聖教目録の成立を検討することを目的とする。このことは、高山寺現存の約 3 万点にのぼる資料群の成立過程や伝来状況(保管・整理・あるいは加除などもあったと考えられるが)を大局的に検討し、個別研究において高山寺資料の日本語研究資料としての有効性を更に高めるための基礎資料となることを目的とした。

(2)鎌倉時代の言語研究の主眼は「口頭語」の発掘にあったことは疑いようのないものである。この研究の推進において高山寺資料が非常に多く利用されたことも周知の事実である。そしてその研究は相当程度進展したのであるが、それは龐大な文語の中にわずかに口頭語的事象が点在するといった状況であると考えられるものである。なぜ、大規模で綿密な調査にも関わらず、口語の体系的・記述的研究が進まないのか。それは、先学の主として取り上げた資料が、方便智院院主であった「定真」およびその弟子「仁真」に関わる、伝授・次第類が中心であったことが原因のひとつと考えられるのである。先述した土井光祐氏による一連の研究によると、方便智院の系統は真言密教の伝授といった事相関係に重点をおいた活動をしていたことが明らかとなっている。確かに定真・仁真関係資料が高山寺聖教の主要な部分をしめてお

り、同寺を代表する資料群であることは否定できない。しかし、それら事相関係資料をいかに大量に調査しても、そこに口頭語的事象が多く含まれていることは考えがたいのである。これら事相関係の資料はほとんどが定型的文章構成であり、師の言説を忠実に記録していく、というような活動の余地はほとんど見られないものだからである。

つまり、高山寺の資料群がどのように形成され、いかなる集団によって書写・伝授、あるいは講義資料として利用されてきたか、そしてどのように管理・保管されてきたかについて総合的にかつ系統的に調査検討することがどうしても必要となってくると考えられる。

### 3. 研究の方法

(1) 聖教に記載された所蔵を示す符号(目録整理番号)のデータベース化の実施。この点については、高山寺調査団により組織的に進められているものがある。しかしながら、この作業は調査団の聖教目録の理解度や関与の程度により相当な濃淡があることは事実である。本研究においては、これらデータベースは参考にしていくことはもちろんであるが、独自原本調査によりデータベース作成を推進していく。データベースに必要な情報は、現存聖教の書誌(題、奥書、訓点、書き入れ等)・旧聖教目録の記載(主要三目録に分類整理するために記載された記録)・禅浄房聖教目録(従来、顧みられることのなかった聖教目録に関する記載)の3項目であり、書誌についてはすでに『高山寺資料叢書』で公刊されているのでこれをベースに入力し原本で確認する。このデータに原本調査で得られた聖教目録の記載等を追加して整理していく。こうすることにより、現状の高山寺経蔵では知ることのできない鎌倉時代草創期の聖教の収集と所蔵の実態が明らかとなるのである。

(2) 高山寺記録類の原本調査。この必要性に関しては、以前、宮澤俊雅氏により新たに見出された資料がある。この記録には、過去に禅浄房(高山寺草創期の聖教管理責任者と目される、明恵上人の高弟)関係の聖教が一括して寺内の道場である法鼓臺の聖教として移管され登録し直されたことを示す記事が発見された。この資料の(再)発見により、さらに資料を博搜していくことで聖教目録の構成に関する新規の知見が得られる可能性がある。

(3) 寺内の塔頭と僧侶の事績の再検討。これらの項目はすでにある程度研究がすすんでいたものもあるが、多くは現存資料から

跡づけられる事績を時系列的に述べるにとどまっており、寺内における学僧や塔頭、そよびその学統との間のダイナミックな関係として位置づけることは遅れているし、見逃されてきていた。高山寺資料の特徴として、現存する表紙に記載された所蔵を示す符号と聖教目録の番号が極めて良く一致することがあげられる。

(4) 以上の点を総合的に検討して、従来見逃されてきた旧所蔵番号を詳細に検討していく。合わせて高山寺において聖教をどのように管理し利用してきたかの検討を、なるべくその当時の寺内における僧侶等の事績を「目録作成活動」の観点から詳細に跡づけていくことにより、いつ、誰が、どのように聖教目録の作成や聖教の管理に携わったのか、あるいは関与しなかったのかを解明していく。高山寺内の塔頭の一つである、方便智院開祖の定真は、明恵から寺主としての責任を負わされており、明恵存命中から聖教目録作成に積極的に関わってきた。明恵没後も相当程度目録作成と関わりがあったことが推定でき、定真没後は方便智院第二世の仁真が聖教目録の作成と聖教の管理に携わっていたことが徳永良次の研究により判明している。これから考えられるのは、聖教目録の保管と整理が、鎌倉時代建長年間以降ほぼ方便智院の学統によって行われてきたことが推定でき、方便智院の一統にとって使いやすいように経蔵の再編成が行われた可能性が考えられるのである。この点をさらに明らかにするために、方便智院の各学僧の事績を、「目録作成活動」という観点から再整理していくことが必要である。また、同時に他の有力な塔頭である、十無盡院、覚園院などといった各僧坊における活動の記録も検討していく必要がある。特に、方便智院の定真とならんで高山寺草創期に聖教目録作成に大きく関与した覚園院第一世の義淵房靈典とその代々についての事績を明らかにすることは極めて重要であると考えられる。

### 4. 研究成果

(1) 聖教目録の作成には、方便智院の学統を受ける僧侶の集団が関与していたことが知られていたが、本研究により高山寺知事である義淵房靈典が初期の段階では大きく関わってきたことが判明した。

禅浄房空弁がおそらく最初の聖教管理者であろうが(決定的な証拠は見いだせていない)、この禅浄房が管理していた聖教の引き継ぎを空達房定真と義淵房靈典が行ったことは記録類や聖教目録の奥書から確認できた。その後、定真とその学統である方便智院の代々が主として真言に関わる聖教の整理

と管理を重点的に行っていたことが知られる。それが法鼓臺聖教目録として現存しているものである。法鼓臺は当初高山寺の道場として講義等が行われる場であったと推定されていたが、次第に付属する形で経蔵が整備されていきそこに真言関係の書籍が収められるようになっていったものとみられる。

(2)このような動きとは別に、真言以外の書籍などについての整理は義淵房靈典が行ったものと考えられる。従来指摘されているように、「高山寺聖教目録」は靈典による注進と江戸時代の高山寺僧慧友僧護により推定され、こんにちではそれが定説化している。その定説に加えて、今回の調査・検討により「禅上房書籍欠目録」という聖教目録は、奥書等は残されていないものの筆跡等から明らかに靈典の手によるものである。

つまり、真言関係典籍は方便智院の代々により法鼓臺聖教として再編成されていたことが判明した。その移行にあたっては、まず靈典による禅浄房聖教のインスペクションが行われ、真言関係典籍とそれ以外の華嚴関係典籍と辞書・外典等に分割整理された姿が、高山寺に現存する「公的な」聖教目録の姿となっているのである。それは、高山寺聖教目録(建長二年 靈典筆(推定)) 高山寺経蔵聖教内真言書目録(建長三年 長真筆) 法鼓臺聖教目録(鎌倉時代中期、仁真筆)の三点である。

(3)明恵上人没後の高山寺においては、華嚴宗の講義・教相面を重視する十無盡院(義林房喜海を第一世とする)と真言宗の伝授・事相面を重視する方便智院(空達房定真を第一世とする)の二大流派が隆盛を誇っていた。しかしながら、先行研究でも指摘しているように、明恵没後数十年の後には華嚴の法統は大半が高山寺を出てしまい、残ったのは方便智院などの真言系のとりわけ事相を重視した集団が大きな勢力を誇ったことが判明した。

(4)その後、高山寺内では華嚴系の学統は途絶え、方便智院を始めとする真言の伝授と中心とした事相面が重視されることとなり、それに従って再度聖教と目録の再編成が行われた。この最初の動きが、(1)で述べた建長年間の聖教目録作成活動である。この時点では十無盡院の代々は高山寺内に留まっていたが、活動は低調を極めていた。第一世の義林房喜海は早くに没してしまい、第二世以降の代々は次第に活動の拠点を、寺外の神尾山寺に移していくこととなる。

(5)義淵房靈典を第一世とする覚園院の代々は、それら聖教目録の再編成作業にはほ

とんど関与しなかったことが推定される。

高山寺内の塔頭ごとの相承については、現在までに三種類の記録が知られている。これらを比較検討してみると、覚園院の代々は室町時代応永年間までは八代が相承していることが確認できた。一部資料ではその後も若干の僧名が確認できるものもあるがそれにしても応永年間で途絶えている。

覚園院とその代々についての記録は、高山寺内外に総計57点の資料を見出すことが出来た。これら記録類を、僧侶事に整理すると第一世の義淵房靈典に関する記録が突出して伝存している。約半数は靈典に関するものである。逆に、覚園院代々の中で全く記録を見出すことが出来ない僧侶も三代にわたり続いている。

(6)覚園院代々の中で、第二世の明悟上人は口伝の存在を伺わせる記述を持った資料が確認できた。このことは明悟が何らかの講説といった講義に関わった可能性を示唆していると推定できる。それ以外には、第四世の照空上人についての記録が見られることが指摘できる。また、これら覚園院の代々が高山寺以外の華嚴系の僧侶とも密接な交流があったことが高山寺内外の記録から明らかとなった。このため、真言系の方便智院代々やその他の真言系の僧侶が多数派を占めつつも、一部では依然として華嚴関係のさまざまな活動・交流が続いていたことも推定される。

しかし、いずれの覚園院代々の僧侶も義淵房靈典以外は聖教目録の保管や整理に携わった記録は見られなかった。このことは、先に指摘したように、方便智院の一統とその教学活動に同調する集団により、利便性のある形で聖教の再編成が行われていき、それに合致した聖教目録が作成され、利用されていたことが判明する。

なお、高山寺調査の最終段階において高山寺教学の伝来に関する重要な資料を発見(正確には再発見)することができた。それは、古来「学問印信」と呼ばれていた木製の掛板である。内容は建仁年間に明恵上人を中心とする同行の僧侶達が守るべき学問上の戒律について明恵自身が記したとされているものである。高山寺開基以前の華嚴宗関係に関わる資料としてこれまでに知られていないような逸品であることは間違いない。

この板は江戸時代初期の高山寺僧顕証により、体裁等の調査がなされ、明治18年に近代的な調査が行われた記録にも記載されていたが、昭和40年代の高山寺調査団による悉皆調査の時にはまったく注意されておらず、寺内の経蔵にしまわれたままであった。今時、徳永良次の調査・検討により「学問印信」の江戸時代にかかる書写資料があること

から、再度経蔵を調査したところ経蔵の一階書庫から木製の木箱に収められた「学問印信」の掛板が発見された。

果たしてこれが明恵上人自筆のものがどうかについてはさらなる検討が必要であるが、いずれにしても相当な年月にわたって華厳関係の重要什物が寺内に保管されていたことは、本研究にとって極めて重要な意味を持つものと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

徳永良次、高山寺・義淵房靈典と覚園院代々(二)、北海学園大学人文論集、第42号、29-59、2009、無

徳永良次、高山寺諸院代々一覧、高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、平成19年度、131-148、2008、無

徳永良次、高山寺・義淵房靈典と覚園院代々(一)、北海学園大学人文論集、第38号、39-84、2008、無

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

取得状況(計 件)

〔その他〕

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

徳永 良次(TOKUNAGA YOSHITSUGU)

北海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：50254694

(2)研究分担者

(3)連携研究者